

明

1
2020

创刊号(1983)



師走風

能村 研三

古稀そして

「沖」五十周年

今年の干支は「庚子」。新しいことにチャレンジするのに適した年であるそうだ。

昨年の暮に私は古稀を迎えた。古稀などという言葉は慣れ親しみにくく不思議な気持である。

「沖」の創刊十五周年の記念大会は帝国ホテルで開催され、その時の大会委員長は吉田明さんが務め、私が発行委員長として挨拶をした記憶がある。その挨拶でたしか三十五年後の事を話した。つまり私が七十歳になり「沖」が五十周年になることを、遠い未来のこととして話したのだ。その年が現実として目の前にやってきたのだ。

平成十三年に「沖」を継承して今年で十九年目になる。

昨春秋には、五十周年事業として「沖」の皆さんのおすすりもあつて、私の初めての句碑を建立した。

登四郎の句碑が十五基もあり、それを見守っていくだけでも大変なことなので、自分の句碑などは考え

流麗な五句立て 屏風風鶴忌

没後五十年・石田波郷回顧展

鶴亀算なかなか解けぬ秋の暮

留守中の冷を留むる隠し鍵

獺期果つ一升瓶の野盗飲み

生牡蠣を啜る心得口にあり

三の酉なき年 禍難多き年

屏風立ての眉丈しぐるる鶴様路

長崎くんち二句

くんち龍ひねりくねりの宝珠追ふ

寸止めの山車所望やれの声響く

払暁にひと雨ありし師走風

でもみなかった。しかし、初めての句碑が建つてみると、句碑もさることながら能登羽咋の地にも、愛おしさを感じるようになった。

句碑建立に際して、氣多大社境内の大黒天が見守ってくれる場所を提供していただいた大社の皆さん、そしてこの事業を積極的に後押しして下さった鶴家総本家の道端御夫妻に感謝の気持で一杯である。

さて五十周年の記念の年がスタートした。そして今年はオリンピックイヤーとして日本中が湧き立つ年でもある。

アンソロジーの募集も始まり、いよいよ秋の大会にむけて、その準備が忙しくなってきた。

この記念すべき年を「沖」の皆さんと元気に句作に励み、俳壇に向けて「沖」五十周年の句業を高らかに発信していきたい。

能村 研三

柏手 森岡 正作

半鐘の錆び切つてをり鴉の贅
樹の洞に栗鼠の餌を溜む神の留守
柏手のひとつ掠るる留守詣
白鳥来沼の序列の定まれり
甘んずる西行庵のすきま風
家中が婚に出払ひ茶の咲けり
雪もよひ中仙道に鯉濃屋

板前は

先日、教え子達の還暦会に招かれた。私とは十歳違いの区切り良い連中が七一名程いて、皆愛想よく愉快な時間となった。昔のことを思うと、例えば進路のことでは、兄貴分のような口調で、「お前はラーメン屋になれ」とか、「何子は寿司屋の女将さんが似合う」などと言ったものである。実際まだ景気の良い時で、田舎の友人は脱サラをして、ラーメン店を東京に四店も開いていた。そんなこともあってか、末には「お前が寿司屋を出したら、俺も資金出して食へに行くよ」と言ったこともあった。今になっては何と馬鹿なことをと思うが、結局誰もそうならず、「先生もう一軒行こうよ」と言ってくれる生徒達であった。

棒稲架や先祖累々立つごとく 森 正江
近年はコンバインで稲を刈り、稲架に干すことが少なくなつた。棒稲架は主に東北地方に多いようだか、稲を干すとき、棒にまくように干す。「くい」にかけるので「くいがけ」とも言い、よく風が吹くようなところでの掛け方である。遠くから見ると人が佇んでいるようにも見える。これが先祖代々の人たちがしづかに見守っているように思えた。

御座船を要に供奉や秋澄めり 小倉 征子
小倉さんは福岡の方。沖ノ島と宗像の漁師とは古くからの関わりがあつた。宗像大社の秋季大祭では御座船を要にして大漁旗を掲げた船団が、大島港から神湊港までを勇壮に進む海上神幸を行う。三女神の御神体を乗せた船を御座船と呼ぶ。秋澄むの季語がいかにも相応しい。

新涼や木組みの家の設計図 角口 秀子
日本人にとっては昔から馴染んだ木組みの家には温かみがある。コンクリートや新建材による簡易的な工法による家づくりより、木組みの家を建てることは憧れの一つであるのだろう。そんな木組みの家の設計図を手にしながら夢が膨らんだ。

何もかもみな村の人村歌舞伎 千葉 禮子
千葉さんは青森の方であるが、青森には地域で行われる村歌舞伎がある。福浦の歌舞伎は、文化的な催しを心待ちにする人々にとつて、最高の娯楽として定着した。スタッフ・役者ともに全員が村の人であることはすばらしいことだ。



穴惑まどふは遊び足らざるや 吉澤 濱子
吉澤さんは九十歳を越えられているが、例会に来られるなどお元気で、市の大会などにも参加される。「穴惑」は、晩秋になつても入るべき穴を見つげられず、もたもたしている蛇のことが、作者は蛇もまだ遊び足りないからうろろうろしているのだろうと思つた。発想が若々しく柔軟で面白い。

すすきどう活けても風の名残あり 坂下 成紘
野原から採ってきた芒を床の間に活けることにした。生け花というものはただ花瓶に植物を入れるだけではない。植物を単なる物ではなく、生き物として見なす。野で風に吹かれていたままの植物を、生かしながら活けなければならぬ。本当の自然を知り、自然の一部を切り取る作業なのである。床の間に活けた芒には風の名残りが感じられた。

能村登四郎の軌跡〔17〕

能村 研三

明け易く明けて水原先生なし

『天上華』昭56

昭和五十六年七月十七日に水原秋櫻子が亡くなった。享年八十九。登四郎は昭和十四年に師事して以来四十数年の子弟の交わりであった。「馬酔木」に入会した時、秋櫻子は四十七歳で血気盛んな頃で、怖くて近づき難かったが、何より人の痛みを分かる人であったと言う。登四郎は「沖」を創刊してからも、荻窪の秋櫻子宅には頻繁に訪ねたが俳句の話はあまりせず芝居の話が中心であったそうだ。「水原先生なし」とは師の亡きことを夢ならぬ現実として受け止めた率直な実感の吐露なのである。

一雁の列をそれたる羽音かな

『天上華』昭56

前書に「四十年学びし『馬酔木』を辞す」とある。この句の自解で登四郎は「先生が逝去されて百日法要が行われた。私はこの席に列席して心で先生にお別れをすると、翌日『馬酔木』脱会の意を表した」と、万感の思いを残しながら慣れ親しんだ「馬酔木」の多くの仲間と別れた。この時「沖」は創刊から十一年目、これまでは「馬酔木」の僚誌の一つであったが、完全な独立誌となり、登四郎自身も自分の道を歩むこととなった。

ほたる火の冷たさをこそ火と言はめ

『天上華』昭56

登四郎は季語別の俳句集を作ることをはひどく嫌った。これを私なりに解釈すると、登四郎の俳句のモチーフはその場限りに終わらず、幾年いや幾十年を経てもつき、拘り続けているからではないだろうか。この句の原型とも言うべき句が三年前に作った句〈螢日や火の冷たさもありといふ〉であり、句集『冬の音楽』に収められている。同じモチーフで推敲を重ね見事に完成を遂げた句で、登四郎の拘りは妥協を許さない。真っ赤な火の色よりも、青白い螢火の冷たさに激しさを感じていたのである。

削るほど紅さす板や十二月

『天上華』昭57

まだ電気鉋が使われていない時代、大工さんが材木を寝かせて、鉋を掛ける姿を見かけた。登四郎は父が宮大工で工務店を営んでいたので、子どもころは鉋屑が花かつおのようにしゅるしゅると舞うのを飽きることもなく見ていたに違いない。削られた材木が、削るほどに赤みをおびて美しく目に入って来た記憶が残っていて、それが人の肌のようにきれいな艶であったのをしっかりと覚えていたのだろう。厳寒の十二月ともなれば、いっそうそれが美しく輝いて見えるであろう。



蒼茫集



秋草伝ひ

望月晴美

憂国忌

石川笙児

秋光の神さぶ羽昨神鶉句碑
先師と師の句碑は秋草伝ひかな
首ふるも言葉のひとつ秋桜
新米といふめでたさの重みかな
柚子風呂へ病知らずの身を伸ばす
* 着膨れてゐても空腹なる不思議

* 憂国忌夜半まで消えぬ鱗雲
剃刀の研ぎ音背に桂郎忌
東京を故郷とせり万年青の実
鷹よぎる稜線粗き妙義かな
旧道は江戸の道幅西の市
鷹匠を見る鷹の眼の爛々と

地の源

甲州千草

神鶉句碑

栗原公子

海穏やか弾けさうなる海桐の実
銀杏散る海へ真直ぐな神の道
弾けては祝ぎの色なす海桐の実
冬月の満ちて艶増す建立碑
* はじかみに地の源のほのかな朱
唐辛子落日後の鋭き五感

秋麗の海たひらかや神鶉句碑
おほかたは丸く収まる芋の露
* 鬼の子に学ぶ空気を読む力
葡萄食ぶ甘言といふ落し穴
大花野とき己を見失ひ
神の留守バスに乗らうか歩かうか

精霊

能美昌二郎

* 精霊の踊る形に木の実独楽
林檎剥く戦後の歌を唄ひつつ
八方に飛蝗ちらして測量士
古民家の軒を明るく吊し柿
吟詠の音吐朗朗秋澄めり
天辺で返事する声松手入

ほろ酔ひころ

藤原照子

天の意の計れず後の更衣
酔芙蓉ほろ酔ひごろをつゆ知らず
旅ひとつ逃せし悔いや秋の虹
小諸なる千曲の水禍台風禍
子の腕を恃む吊橋紅葉狩
* 饒舌のみみぢ寡黙の杉林

晴ればれと

千田百里

句碑開眼告ぐかに能登の霧走る
神鶉句碑成り祝ぎいろ初むる氣多もみぢ

をなご衆に晴ればれと散る紅葉かな
佇めば虫の闇てふ磁場にある
* 宝石の値札裏向き竜淵に
波郷忌の大腿で来る木枯も
正装 松井志津子

* 即位礼富士山正装の初冠雪
神苑に鳥の声透く冬はじめ
残菊を括り一枚身に足せり
ていねいに魚の灰汁取る野分あと
蠅螂の青き死斧を挙げしまま
冬霞抽斗といふ過去の箱

藻塩

宮内とし子

* 衣被能登の藻塩をひとつまみ
竹人形露けき竹の髪ゆたか
三味の音の聞こゆる路地の加賀しぐれ
俎板の魚の動ける神の留守
うそ寒や透けゐてとれぬ指の刺
貫禄は予約札にも大熊手

潮鳴集



木守柿

安藤しおん

軒なき家

諸岡和子

冠水の泥にりんごのなほ点る

*木守柿ことばひとつの持つ余熱
バス通り統ぶるいちまい朴落葉
はち巻の白菜日和はなち鶏
やつとかめ媪平たく蕪洗ふ

有り口の口の字大き豊の秋

*唐辛子己が辛さに曲りけり
柿十個干して軒なき家に住む
郁子熟す秘密はかたく守ります
仏飯の湯気の高盛り冬に入る

遠心力

齊藤 實

温め酒

石田 静

文鎮の重さほどなる秋思かな
稲刈機田をふた色に分けてゆく
芋の露楯円となりて転びをり
*雪吊に遠心力の有りさうな
新海苔の香りで包む塩むすび

*分からんでもないと継ぎ足す温め酒
停電のしづけさに添ふ十六夜
人柄の滲む言の葉良夜かな
本音まで少し間のある濁り酒
蒟蒻に味よく染みて村祭



『すてん晴』

(自選二十句)

佐々木よし子

風光る波太渡しの手漕舟
いすみ線花菜明かりを弾み来る
草萌の大地におろす集乳缶
風畳敷く料峭の葛西沖
灯ともして花の回廊段葛
夕薄暑貝殻路地をさくさくと
不揃ひの未来びつしり青ぶだう
高跳びのバー越す反り身雲の峰
知らぬ子に袖摺まれし祭の夜

ジャンクションに一閃二閃夏つばめ
躓いて玩具を泣かす夜の秋
鯨飛んですてん晴なり三番瀬
月光の重さを計る弥次郎兵衛
午後の部へオルガンはこぶ運動会
一瞬の富士たふとかり初電車
日脚伸ぶ自転車に積む培養土
億年の遺伝子守る海鼠かな
江ノ電は光の小筐春近し
井戸神の繭玉かちんこちんかな



『分度器』

(自選二十句)

井原 美鳥

福藁や日は産土へ廻り来る
遠のくは降下に似たり雁帰る
けふの木の芽あすの木の芽と湧きにけり
モード誌のをとこの微笑三鬼の忌
目つむれば街騒も波さくら貝
未黒来て夜潮とまがふ地の起伏
風光る草の名前をこゑにして
母の日や短縮番号1に母
羊水に海の恵みや夜光虫

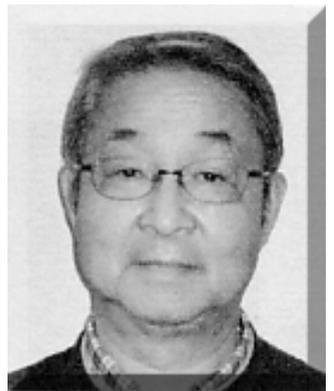
烏賊釣火群るるは星の渡海とも
転生の父や五更のほととぎす
蟬の森投網のなかをゆくごとし
榊の木がいちばんのつぽ小鳥来る
大いなる分度器鳥の渡りかな
風邪熱のはじめ夜空を被^きるやうな
梟のまばたき星をまたたかす
前生の鳥の記憶に蘆火かな
漢字帳に母がいつぱい日脚伸ぶ
よく枯れてかちかち山はきつと此処
鳶上げて冬日分けあふ安房の山



年間十二句

仲里 貞義

かはたれの光を寄する薄かな
 けふ髭は剃らずに勤労感謝の日
 一見はならぬ通りや小夜時雨
 春キャベツ切れば迷路の出口見ゆ
 羽田発九州弁の春コート
 葉桜や躰の芯にあるゆらぎ
 走り茶の知覧特攻隊の遺書
 打つことを知らずましてや蠅叩
 炎帝の御成りアスファルトの轍
 稲妻やはたと解けたる方程式
 春風の起点を見たり太極拳
 愛着も執着も断つ帰燕かな



沖作品



能村研三選

赤のまま手折り思ひ出持ち帰る
 晩秋をテールランプのこぼしゆく
 穴惑まどふは遊び足らざるや
 文机に水引草の紅ともる
 おだやかな茶筌の泡や菊日和
 送葬と生誕とひとつの秋に
 すすきどう活けても風の名残あり
 被災すも彼の地思へば雁渡る
 戻れずも励むりハビリ野菊晴
 句心を言葉に紡ぐ文化の日
 天を向く無音のことば朴落葉
 秋晴れて鳶の飛翔を高さより
 日を溜めてうすゆき草の花の絮
 棒稲架や先祖累々立つごとく
 旧道は旧友に似て冬たんぽぽ

市川市

吉澤 濱子

石川

坂下 成紘

岩手

森 正江

* 誰か行く入野に秋の時雨かな
 落鰻つかみあげたる洞間声
 御座船を要に供奉や秋澄めり
 殿の船も祓はれ秋祭
 神幸を終へし夜を湧く鬨雲

* 「迂回路」の手書き看板野分あと
 数へ唄の声遠ざかる秋夕焼
 新涼や木組みの家の設計図
 秋澄むや鋭角となる話声
 きつく締む帯に差し込む秋扇
 何もかもみな村の人村歌舞伎
 栗拾ひ背山にこもる風の音
 晩秋や五重塔の屋根の反り
 ガン検の用紙確かむ夜長かな
 冬立つや形見の背広子に出して

福岡

小倉 征子

千葉

角口 秀子

青森

千葉 禮子